

～河口に広がる豊かな自然環境の再生に向けて～

安岐地区藻場干潟保全活動組

地域の特徴

安岐地区は、大分県の北東部、国東半島の南東に位置する。両子山(721m)を頂点として、海岸に向かって放射状に丘陵性の支脈が走り、南北に長い地形を呈している。当該地域は山稜が短いため大きな河川はないが、両子山を源流として伊予灘に注ぐ双子川、安岐川の2つの川が流れている。



地域では、水産物として天然のワカメやヒジキなどの海藻類が獲れる。また、伊予灘で漁獲されるマダコ、タチウオ、ハモは地域の特産品となっている。

活動地区の現状と取り組み

①藻場

活動地区は、安岐川から豊富な栄養塩が供給される海域で、沿岸には大型の藻類であるアラメやのホンダワラ類が繁茂する豊かな藻場が存在していた。しかし、平成25年頃から藻場の減少がみられるようになり、磯焼けが頻繁に確認されるようになった。また、そのころから、水産資源であるアワビやサザエといった漁獲対象種が減少する傾向がみられた。磯焼けの原因はアイゴなどの植食性の魚類や、増えすぎたムラサキウニによる食害が大きいと考えられた。そこで、藻場再生における対策である食害生物の除去を主とした取り組みを開始することにした。



磯焼けの状況

②干潟

活動地区は、安岐川の河口域に位置し、藻場と干潟が混在する豊かな生態系が存在する地域である。しかし、長期的な環境の変化によって、浮泥の堆積がみられるようになり、干潟全体でも環境が悪化し、水産資源であるアサリが大幅に減少した。そのため、干潟環境及びアサリ資源の回復を目的とした耕耘、アサリ母貝の放流、モニタリング調査を開始した。

活動方針

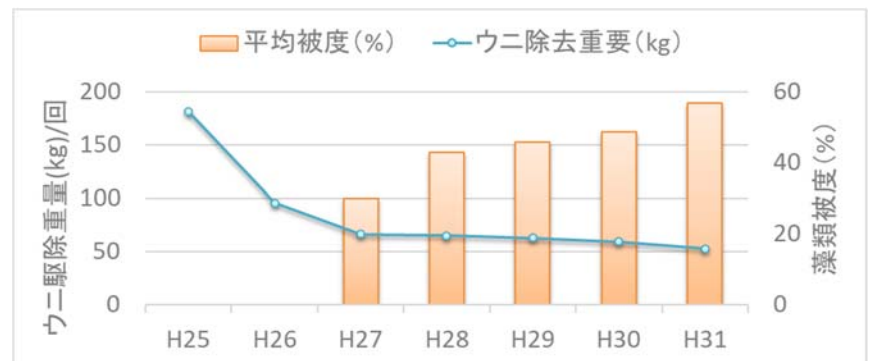
当該組織の活動の目標は「藻場の再生・維持」及び「干潟環境の回復」で、目的はそれらの再生や回復による海域の基礎生産力の向上及び漁業資源等の回復・維持である。

地域では、漁業者の減少、高齢化が認められる。しかし、藻場及び干潟の保全活動ができる人員は確保できる。そこで、組織の体制は、地元海域及び環境の変化を熟知する漁業者及び漁協職員で構成した。

活動成果

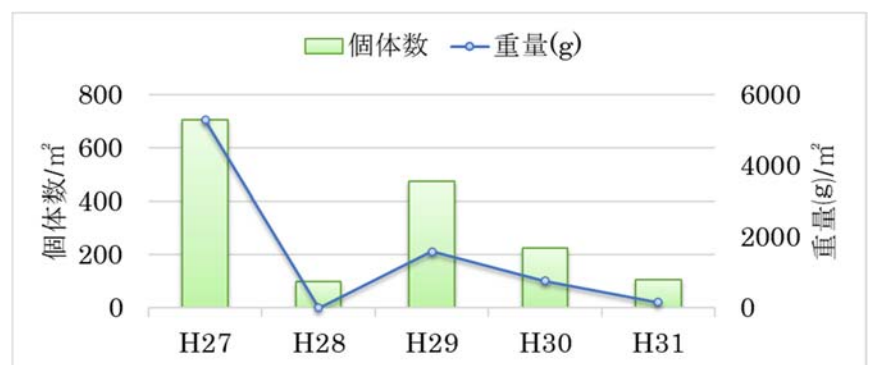
①藻場

活動区域では、ウニ類の除去により、モニタリング当初から徐々に海藻の被度が回復する傾向がみられた。また、ウニの一回当たりの除去重量も初年度(H25)からH27年にかけて大幅に減少し、その後は緩やかに減少している。藻場の回復要因としては、ウニ類の除去活動に加えて、母藻の設置効果や残存する天然藻場から種の供給が挙げられる。この海域では一部で磯焼けは進行しているものの、近隣には藻場が残存している。こうした海域の特性もあり、藻場が比較的順調に回復しているものとする。



②干潟

活動区域では、耕耘によって干潟環境が改善されつつある。しかし、アサリ個体数の経年結果は、モニタリング結果の残る平成27年から昨年にかけて減少傾向にある。アサリ母貝の放流量は、年によって多少の変動はあるものの、一定量確保しつつ、資源回復に努めているが結果には繋がっていない。原因としては、放流用のアサリ母貝の質や環境適応力、それに伴う生残率の低さが考えられる。



今後の課題

藻場は、ウニ類の除去により順調に回復している。しかし、現在、それほど大きな問題となっていない魚類による食害が、今後、海水温の上昇などの要因で悪化する恐れがある。そのため、藻場の更なる回復及び維持には、今後もウニ類の除去を継続するとともに、魚類による食害対策も検討しておく必要がある。

干潟については、環境の改善は図られていると考える。しかし、干潟環境の回復の指標としているアサリ資源については、活動開始から減少傾向にある。そのため、今後の干潟の活動においては、資源回復に至らない要因と考えられる放流用母貝の変更及び検討が必要である。